

井上光晴『明日』再読のために

畑中佳恵

一 はじめに

本稿は、二〇二四年一〇月一九日の第七三回原爆文学研究会（於長崎大学）で発言した内容の記録です。井上光晴『明日』——一九四五年八月八日・長崎』（『使者』一二号、一九八二年二月／集英社、一九八二年五月刊行／以下、『明日』と記載）を研究会で再読するにあたり、一読者として気になることを話しました。話題提供を主な目的とするものであり、先行研究をふまえた論としての体裁をなしていないことを予めお断りしておきます。以下、四項目に分けて述べた内容をそのままの順序で記します。

二 作品発表時をめぐって

最初に、作品発表時に関する情報を整理して気づいたことをお

話しします。皆さんもご存じのとおり、井上光晴には原爆とかわる作品がいくつもあります。「手の家」（一九六〇年）、「地の群れ」（一九六三年）、「夏の客」（一九六五年）、「母・一九六七年夏」（一九六七年）。これらは一九六〇年代に集中して発表されており、そこから約一四年空けて、自信作^①の中編『明日』が発表されました。

作者が第二次大戦末期から戦後にかけてどう過ごしていたかということを確認しておきます。井上光晴は長崎原爆を直接体験した人ではありません。一九四五年六月の佐世保空襲を経験し、八月一日は、炭鉱者技術養成所の教師をしていた崎戸島（長崎県西彼杵郡）で迎えました。戦後の住所は、福岡、佐世保、東京と移動しています。一九五五年に東京に転居してしばらく『週刊新潮』の仕事をしていました^②。井上荒野^③によると、専業作家となつたのは一九六三年頃だそうです。

無署名で記事を書いていたため、どの記事が井上の手によるも

のか見分けるのは困難なのですが、高橋吾朗『週刊誌風雲録』（文藝春秋、二〇〇六年一月）によると、井上光晴の文体は、同じく記者として活躍した草柳大蔵と比べ、カギ括弧が断然多いのだそうです。福岡県立図書館所蔵（欠号あり）の『週刊新潮』を一九六三年刊行分までめくると、原爆関連の記事ならば次のようなものが目につきます。

- ① 一九五六年六月二六日号「生きていてよかった 原爆悲劇の記録映画完成」（全二頁）
- ② 一九五七年五月二〇日号「原爆娘の記録——ある踊り子の場合——」（全五頁。東京で舞台に立つ広島出身の森田テツ子さんについて）
- ③ 一九五七年八月一二日号「原爆の遺産 ABC」（原爆傷害調査委員会）（全五頁。写真・土門拳）
- ④ 一九五七年八月一二日号「特別レポート 八月六日の遺産 はじめてルポされたABC（原爆傷害調査委員会）の実態」（全八頁）
- ⑤ 一九五八年五月一九日号「消える爪あと 浦上天主堂撤去の真相」（全六頁。長崎の原爆遺構の処遇について）
- ⑥ 一九六〇年一二月五日号「長崎のピーナッツ」（全一五頁。双子の歌手による、異国情緒と原爆をメインとした長崎めぐり）

前述の『週刊誌風雲録』によると、④の無署名記事は草柳大蔵によるものです。ABCが被爆者の資料を強引な手法で収集し

「原爆戸籍簿」を作成していることを糾弾するこの記事は、たしかに証言を直接引用するカギ括弧がほとんど見当たりません。

それとは対照的に、原爆により瓦礫と化した浦上天主堂の現状と、その処遇をめぐる議論を紹介する⑤の記事は、現地にたたくむ二〇歳の青年や映画『生きていてよかった』のロケで現地を訪れた女性の印象的な言葉を、カギ括弧付きで長々と紹介しています。この記事には、五年後に発表された小説「地の群れ」の本文と合致する箇所が幾つもあり^④、井上光晴による記事であることは間違いないようです。この時期の記者としての活動が、後の創作活動とリンクしている例として見逃せません。この点については、本稿第四章で改めて触れたいと思います。

①の記事は、浦上天主堂の地に落ちた聖像と撮影した写真が見開きで掲載されるなど、⑤との連続性が感じられますが、井上光晴の関与は不明です。また、長崎は観光地としての歴史が古いので、とりたてて珍しい記事というわけでもありません。しかし、この後、一九七〇年代から『明日』が発表される一九八〇年代にかけて、次のような国鉄の大型観光キャンペーンが続いたことは頭に入れておくべきでしょう。

一九七〇年一〇月〜七六年二月「デイスカバー・ジャパン」
一九七七年一月〜七八年一月「一枚の切符から」
一九七八年一月〜八四年一月「いい日旅立ち」
一九八四年二月〜八七年三月「エキゾチック・ジャパン」

『明日』には、長崎の異国関連の歴史や文化事項とかかわる語

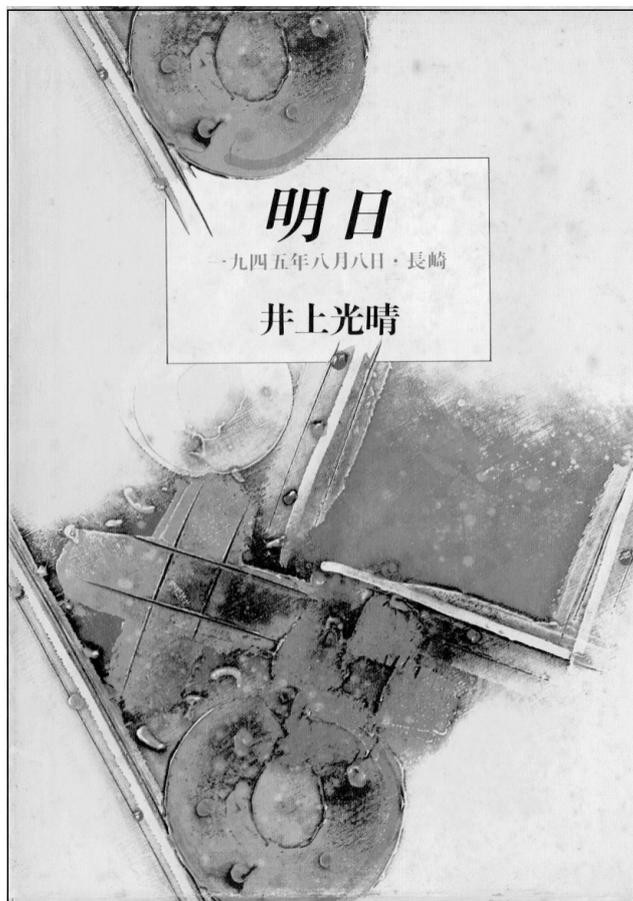
句、名所の地名等が所々に書き込まれています。以下に、本文からいくつか例を示します（引用は全て単行本に拠り、注目箇所は傍線を付します。以下同。）。

- ① 「上海丸に乗ったのだつたな、白水君は、あれから。」（七八頁、※コックたちの海外関連の経歴）
- ② 「水ノ浦でビードロを吹きよんなる人のおらすとよ、今でも」（九九頁、※ビードロは、異国由来の工芸品）
- ③ 「もう少し行くと、幕末の頃、太夫や格子女郎の踏絵が行われたという神社の境内を過ぎて、丸山の方に降りられるのだが、」（一四七頁）
- ④ 「八幡様のおくんちの踊り町に当つた際、買つていたものだという。佐世保に住んでいた頃、それも十年以上も前に、妹が稚児行列に出た時のことはよく覚えている。」（一七二頁、※買つていたものは、祭りの衣装用生地）

とくに③では、長崎の繁華街の地理的説明を行う際に、遊女の踏絵という南蛮趣味的なイメージを挟み込み、丸山遊郭という華やかな観光地にも触れています。文脈上、それらにわざわざ言及する必要はないため、作者が意図をもって書き込んでいると考えられます。井上光晴が東京で執筆した長崎・原爆とかかわる作品の中でも^⑤本作は、国内ツーリズムのまなざしを意識し、読者獲得に利用しようとした側面があるのではないのでしょうか。

三 単行本の意匠をめぐって

本章では、とくに単行本の意匠から読み取れることや、本文との関係について気づいたことを述べます。本作単行本は化粧箱に収められています。装画は、丸や四角など図形を配した抽象画を得意とする堀内菊二（主体美術協会所属）によるものです。



『明日 一九四五年八月八日・長崎』化粧箱

いろいろな解釈の仕方があると思いますが、レールと電車のイメージを読み取ることができないのでしょうか。原爆被災によってレールが断線し、車窓は毀れ、車輪を思わせる青色系のマルは赤色系のバツになり機能を停止してしまう、というイメージです。小説の中で、電車は変わらぬ日常の象徴として登場します（一一九頁）。それが、リアリズムでは捉えきれないほど破壊

され変容してしまうという「明日の予告」が感じられます。

本書の布張りの表紙には、中央に銀色でバツ印が刻印されています。爆心地の印が想起されることから、これもまた「明日起きることの予告」といえそうです。なお、扉にはやや立体感をもたせたバツ印のイラストがあり、ギリシャ十字として見ればキリスト教のイメージが重ねられていると考えることもできます。

前述の箱のデザインとかかわるのですが、とりわけ小説冒頭からの数頁は、フラグ（予兆を感じさせる要素）を探すよう、読者を誘導するような表現が見受けられます。車輪のように丸いものが頻出し、読者はその喪失や異形化を予感することで、何げない日常の一片に不吉な出来事の前兆を読み取るということです。小説五頁から七頁にかけて、荷車（五頁）、種トマト、レコード、輪の中の石（以上六頁）、車輪のないリヤカー（七頁）と続き、とくに車輪のないリヤカーは本来回り続けるべき丸がないという、欠如のイメージを強めています。その後も、日輪（二七頁、女性の綽名）、落下傘のような白い日傘（六七頁）など印象深い例をあげることができますし、八〇頁以降に散見される赤い月は、一四五頁で当時の資料にも登場し、実際の一九四五年八月八日の月が赤く気味が悪かったという証言と結ばれることで、わかりやすいフラグとして機能します。

このような表現上の工夫をつうじて、読者自身の今現在、身の回りにも、（丸いものやそうでないものも含め）明日の出来事のフラグがあるということを、示唆しているのではないかと考えます。

四 多様な登場人物とエピソードをめぐって

人物に注目する前に、小説の構成を整理しておきます。本作は、結婚という、男女とその周囲の人々が新たに結びつく場面から、個々の人間・人間関係に視点を移し、全体として群像を描出しています。虚構の度合いの高い物語を展開した後、とくに九章で客観性の高い資料の引用を織り交ぜ、「出来事以前」のリアリティを読者と共有します。それによって、読者は過去を観察する姿勢となり、物語との間に距離感が生じますが、小説最終章には主観性の強い一人称が配置され、登場人物と読者の距離を詰める効果をもたらしています。

この作品の魅力の一つが、群像にみられる多様な属性であることはよく知られています。登場順に列挙したのが、次のリストです。

四番崩れの末裔・石原継夫、浦上刑務所の未決囚・堂崎影男、長崎医大看護婦で新婦の三浦ヤエ、結核の既往症をもつ新郎・中川庄治、三菱製鋼の工員、元フランス料理コック長・胴打弥助、浦上天主堂の信徒・山口由信、重度の精神障害で病院から出される山口富美、未婚で妊娠3ヶ月の福永亜矢、生月島出身の失踪者・石井市松、巨済島から連行された「半島人」（※噂として）、軍属の船員らしい夫の子を出産中の三浦ツル子、日本人の夫をもつ「阿茶さん」、ほかにも空襲による戦死者（※手紙のなかで）など。

例えば三菱製鋼の工員の中にも出征する者とならない者がいるという事実と、そこから生じる周囲の軋轢が書き込まれており、多

様な属性を照らそうとする意図が感じられます。また外国人という属性についていえば、(噂として語られる)巨済島から連行された「半島人」、日本人の夫をもつ「阿茶さん」と呼ばれた中国人の二例がみられます。これを少ないとみるか、あるいは当時の長崎市内の生活者の日常感覚として妥当とみるかは、読者によって判断が分かれるかもしれません。

このような多くの人物を登場させるにあたり、一人一人の姿やその日常を肉付けするための取材はどのようなものだったか、という点が楠田剛士論⁶⁾等で追究されてきました。井上光晴は単行本「あとがき」の自作解説で、調査に基づいて当時の日常のディテールを書き込んだと説明していますが、刊行された証言や復元図に依拠する部分が非常に大きかったことがすでに明らかになっています。

ここでは、『週刊新潮』時代の井上がどの程度、どのような取材をしていたかに目配りすることで分かることはないか、確認しておきます。この件に詳しい資料として、朝日新聞社編『週刊誌のすべて』(国際商業出版、一九七六年一月)から関連箇所を紹介します。

アンカーは取材しない。数人のデータマンの原稿を、編集者の簡単な指示に基づいて、一本の記事に仕上げる。アンカーの腕しだけで、記事はおもしろくも、つまらなくもなる。出版系週刊誌の第一号「週刊新潮」では、作家の井上光晴氏が創刊当時、アンカーをつとめた。(五三頁)

この、コメントをつなぐ手法を編み出したのは、創設期の「週刊新潮」でアンカーをしていた作家井上光晴さんだといわれる。「世の中には、殺したといいながら殺してなかったり、殺さないというが実は殺していたり、いろいろな人がいる。そんな人たちの、筋の通らない発言をへたに解説すると、必ずまちがう。だから、私はナマの声をなるべく正確に伝えるために、コメント中心主義をとった」と、井上さん。

アンカーの井上さんは、取材記者(データマン)に「原稿は話を聞いた人のせりふだけを書いてくればいい」と注文した。「これは、取材記者をまるで録音機のように使うわけで、気がひけますが」と井上さんはいう。「妙な解説を記事にするよりはマシですよ」

データマンがつてきたコメントをのりとはさみで切り貼りし、井上さんはコメントをつなぐ接続詞を書いただけで一本の原稿を仕上げた、という伝説もある。(九六〜九八頁)

同書には「週刊新潮のスタッフになってから、井上さんはしばらくの間は、自分で取材し、書いていたが、しだいに主としてアンカーとして使われるようになった。」(一五九頁)ともあり、初期には自分の足で歩き回り人と会って取材することがあったが、後には取材無しの執筆スタイルが伝説にまでなった、とひとまず整理できます。

『明日』執筆時の取材について、この資料の情報は残念ながら参考になりません。しかし、アンカー時代の「関係者の話をつなぐ」という手法は、八〇年代の仕事である『明日』にも指摘でき

るのではないでしょうか。とくに、章ごとに異なる人物を取り上げ、当日までの行動・会話・思考・手紙等を示す構成に、パッチワーク的な手法が活かされているようにみえます。信仰や犯罪とかかわる噂を解説せずそのまま記述していること、失踪者の行方、競技場付近の歌声の主、出産中のツル子が想起する女、同じく出産中に想起される硝子瓶の指といった事実関係が不明なままのエピソードの多さも、筋の通らないナマの声を伝えるという、アンカー時代の姿勢を思わせます。小説九章で突然、証言資料が引用されることに違和感を感じるという意見がありますが、当時のリアルなコミュニケーションの痕跡をそのまま埋め込んだパートであると考えれば、手法として一貫しているといえそうです。

五 おわりに——印象的な新生児をめぐる

最後に、研究会の皆さんの考えを伺いたいのが、新生児の描写をどうとらえるかという問題です。原爆被災と赤ん坊といえば、何よりもまず、広島の原爆被災をテーマとした絵画、丸木位里・俊作「原爆の凶 第一部 幽霊」（一九五〇年）を思い起こす人が多いと思います。「赤ん坊がたつたひとり、美しい膚のあどけない顔でねむっていました。母の胸に守られて生き残ったのでしようか。せめてこの赤ん坊だけでも、むつくり起きて生きていてほしいのです。」という文が付されていました。同じく「第三部 水」（一九五〇年）にも赤ん坊が描かれ、「乳をのませようとしてはじめて、わが子のこときれているのを知ったのです。20世紀の母子像。傷ついた母が死んだ子を抱いている。」と説明され

ています。ここでの赤ん坊は、希望の象徴であり被害の象徴であるといえるでしょう。長崎原爆の直後に山端庸介が撮影した「道ノ尾駅前授乳中の母子の写真」（『原爆の長崎 記録写真』第一出版社、一九五二年八月）等も、同様の文脈で受容されてきたと思われます。

赤ん坊を象徴としてあつかう作品群に対して、井上光晴『明日』（一九八二年）には、原爆とのかかわりにおいて象徴化される前の、個としての赤ん坊が描かれます。本作では、ツル子という名の母から生まれようとしている一人の新生児に焦点を合わせ、出産の難行・喜びと、その命があつけなく失われる近い未来とのギャップが示されました。近年には、青来有一「鳥」（二〇〇六年、連作短編集『爆心』所収）のように、誕生後間もなく長崎の原爆被災に巻き込まれ、身元証明となるものを失った「私」が語り手となる作品も生み出されています。「鳥」では、たとえ新生児の命が保たれても、一人の個として取り返しのつかない喪失を抱えて生を歩むことになるという視点が、新たに追加されています。

このように、広い意味でのジャンル内（広島、長崎の原爆とかわる表象・作品群）において、過去作をふまえた問題意識や視野の拡大を観察できるのではないかと思われます。新生児の表象に注目することの意義の一つを、その点に見出せそうです。

さらに、『明日』の赤ん坊像は、無垢で無力な被庇護者のイメージではないという点も強調したいと思います。母・ツル子は、自分の胎児を何を考えているかわからない、攻撃的な存在として認識しています。妹の誕生時も「可愛いというより何となく気色の悪い顔をした赤ん坊が、粘土細工みたいな手を覗かせており、不

思議な気がした」(一七二頁)という彼女は、陣痛が始まると胎児の敵意を感じて苦しみます。「子供は本当に生まれたがついてるのだろうか。桃色でくやくにやした生きものは私の内側にいることに腹を立て、蹴ったり転がったりしていた。(※中略)ところが今はもうそんなことはしない。じつと暗がりには蹲って意地の悪い仕返しを始めた。」(一九八頁)、「お願いだから早く何とかして。何を待っているのだろうか、私の子供は。(※中略)子供は隠れんぼうのように何処かの隅に入り込み、出口がないといってやけを起こしているのだ。」(二〇五頁)と、意志と力をもって自分を苦しめる者として我が子を語っているのです。

また、生まれる前からすでに社会化されていることがわかる描写も見逃せません。ツル子の胎児は、ツル子の妹の祭り衣装と同じ布で作った着物を着ることが決まっています(一七二頁)。長崎という特定の地域の文化と深く結びついて誕生すること、地域社会のなかで育まれていくことを期待されているわけです。

胎児とはいえ同時代の物差しで価値づけられ、すでに戦時下の共同体の一員となっており、ことも窺えます。ツル子の夫は、生まれてくる子が男の子であることをツル子の手柄だと考えていますし、元気が良すぎる胎児に「こらおとなしゅうせんか。出撃はまだまだ先ぞ。」(一七六頁)と声かけをしていました。

これらの描写は、新生児を象徴的かつ特権的に表象すること、それによって読者の批判を封じたり思考を放棄させたりすることから本作を遠ざける特徴として評価できると考えますが、いかがでしょうか。

読者は、詩人・井上光晴の横顔を彷彿とさせる詩的リズムに乗

って出産を追体験しつつ⁽⁷⁾、一人の子の誕生に居合わせ、「他でもないその子」が自身の条件下で——戦時下の長崎で、父はおそらく軍属の船員で、跡継ぎと出撃を期待されるなかで——自分の力をどう用いて生きていくかに関心を向けます。またそれと同時に、その子の人生が六時間程で断たれることを強く意識し、心を揺さぶられることにもなります。中野孝次・田久保英夫・高橋英夫による「読書鼎談」『文藝』一九八二年八月)で、最終章に注目した田久保が「ある感動を覚えたんです」、中野が「ホロツとするどころじゃなくて、なにか「たまらん」という気がするね」と述べたのは、本作結末部において感情的な反応を誘う効果が十分に発揮されていることを教えてくれるでしょう。他方、出撃を期待される胎児のみならず、三菱関連の人物の多さ、沖繩戦に関する冷酷な会話など、「戦時下長崎の日常のなかにある暴力性・戦争責任」について読者に考えさせる手がかりが決して少なくないことも確かです。

本作は、観光の要素や感情に働きかける工夫によって一九八〇年代以降の読者を惹きつけ、戦争と原爆と自身の「明日」について思考停止せずに関与し続けることを促す作品であり、今なお魅力的であると考えます。そして、私自身の「今日と明日の非連続性」や、「今日が(取り返し)のつかない明日」の前日である可能性⁽⁸⁾、さらには、明日を予兆するフラグに心を配り自身が為すべきことを意識しようとするとき、二〇二四年一〇月一九日という今日が、原子力緊急事態宣言下にあるということ、それに対する危機感を周囲と共有できていないことを、改めて怖ろしく感じます。今日への気づきを促す本作を読み、批評するという所作

そのものが、「私たちの今日」から目を逸らす行為に思えてならないというのが、本研究会の会員としてもどかしく辛いところだす。

注

- 1 「僕は最後に（※注、『使者』最終号に）載せまますよ。長崎の原爆をテーマにした作ですが、従来のものを超えたものだと思自負しています。」（埴谷雄高・井上光晴「対談 真実とフィクション」『国文学 解釈と教材の研究』一九八一年一月）
- 2 川西政明編『井上光晴年譜』（『井上光晴 十八歳の詩集 附・書誌／年譜』集英社、一九九八年三月）
- 3 井上荒野『ひどい感じ 父・井上光晴』（講談社、二〇〇二年八月）
- 4 『週刊新潮』の記事「消える爪あと 浦上天主堂撤去の真相」と小説「地の群れ」の類似部分を四箇所示す。記事本文をゴチック体、小説本文を教科書体で並記する。なお、小説本文は『日本の原爆文学⑤井上光晴』（ほるぷ出版、一九八三年八月）に拠る。
- ① 五月三日の午後一時、文字通りガレキと化した浦上天主堂跡に降りそそぐシウ雨の中を、コウモリガサをさしたまま身じろぎもせず立ちつくす一人の青年がいた。彼は小一時間ほどそうした姿で、くずれ残った赤レンガの壁を、ほとんど食い入るようにしてながめ、それから教務堂の前に横倒しにされたムシロをかけて並べられている聖マリア像の近くに歩み寄った。／雨の中を、どうしたのか、マリア像の額にハエが二匹、死んだように止まっていて、彼はそのハエにふたたびある衝撃をうけたように、ぬれた目を注いだ。（※中略）／彼の名は松野尋嗣君（二〇）＝長崎造船所勤務＝で、天主堂がこわ

されはじめてからずっと、ほとんど休日ごとに浦上をたずねているのだという。

- ① 瓦礫と化した長崎の浦上天主堂。四年前の五月のある日、津山信夫はそこにいて、崩れ残った赤煉瓦の壁にもう一度焼けただけた血を吹きつけるように雨が降りそそぐのを、殆ど食い入るように眺めていたが、それから教務堂の前に横倒しにされた、ムシロをかけて並べられている聖マリア像の近くに歩み寄った。／雨の中を、どうしたのか、マリア像の額に蠅が二匹死んだようにとまっていて、彼はその蠅を見ているうちに、なぜかいいようのない衝撃をうけた。彼の脳裏にマリア像を自分のものにしたという考えがひらめいたのはこの時である。まだ浦上天主堂の取り壊しが決定しない前、彼は幾度も、その顔半分を放射能で焼かれた黒いマリア像を見上げていたが、（四五頁）
- ② 原爆廃墟取りこわしに対する教会側の主張を要約すると――／
(1)「原爆の廃墟は平和のためというより、無残な過去の思い出にすぎない。憎悪をかきたてるだけのああい建物は一日も早く取りこわした方がいい」（山口大浦天主堂司教談）
- ② 浦上天主堂の撤去問題が長崎市議会で取り上げられた時、「原爆の廃墟は平和のためというより、無残な過去の思い出にすぎない。憎悪をかきたてるだけのああい建物は一日も早く取りこわした方がいい」という大浦天主堂の司教に対して、ある被爆女性の語った言葉を新聞記事か何かで読んだことがあるが、（四五頁）
- ③ 三菱電機製作所に学徒動員中（当時一九）原爆にあい、脊髄骨折（下半身不随）のため、以来十三年間病床にある渡辺千恵子さん（二

九)は、原爆映画『生きていてよかった』のロケで、戦後はじめて母親と一しよにタクシーに乗り、その時初めて浦上天主堂の焼けただれたマリア像をみた人であるが、その時の強烈な印象を思い浮かべながら、次のように訴えた。／「あの時、マリアの顔が半分、放射熱で黒くやけているのをみましたが、もしあのマリア像が人間ならケロイドになっているでしょう。ケロイドはたしかに醜い、しかし生きた人間はその残酷な姿をさらしてどこまでも生きていかねばなりません。その人が強く生きようとすればするほど、ケロイドは醜くなくなります。顔半分焼けたマリア様にも、そういうように生きてもらいたいです。むずかしい理屈はわかりませんが、あの天主堂の廃墟が、どうして教会の人のいうように憎しみを忘れさせないものとなるのか、私は平和ということ以外にあの像を想像することができません」

③ 三菱電機製作所に学徒動員中原爆にあい、脊髄骨折のため、以来十三年間下半身不随の身を病床に横たえている二十八歳のその女性は、原爆映画『生きていてよかった』のロケで、戦後はじめて母親と一緒にタクシーに乗り、浦上天主堂の焼けただれたマリア像をみたのだが、その時の強烈な印象を思いうかべながら訴えたのである。／「あの時、マリアの顔が半分、放射熱で黒くやけているのをみましたが、もしあのマリア像が人間ならケロイドになっているでしょう。ケロイドはたしかに醜い、しかし、生きた人間はその残酷な姿をさらしてどこまでも生きていかねばなりません。その人が強く生きようとすればするほど、ケロイドは醜く(マキ)なります。顔半分焼けたマリア様にも、そういうふう(マキ)に生きてもらいたいです。むずかしい理屈はわかりませんが、あの天主

堂の廃墟が、どうして教会の人がいうように、憎しみを忘れさせないものとなるのか、私は平和ということ以外にあの像を想像することができません」(四五頁)

④ “踏絵” した足をススいだ水を、主に對する贖罪として飲みほしていた先祖代々の、カクレ・キリシタン、殉教者の血に染まった土地。信仰の自由を回復すると同時に、ようやく明治十三年、その昔“踏絵”をした庄屋屋敷を買い取って仮聖堂とし、明治二十八年、フランス人宣教師フレノ神父が自ら設計し、監督に當った“聖地”浦上。——信者たちは、貧しい生活の中から、一錢を得ればレンガ一枚を求め、十錢求めればカワラ一枚を買つというふうにして建設の奉仕をつづけ、大正三年、一応の完工をみるまで、それこそ浦上の信者たちは、祖先と自らの贖罪をかねて粒々辛苦の末、やっと完成させたのである。／いわばこの東洋一を誇つた大天主堂の赤レンガの一つ一つには、こうして、信者たちの血と涙の祈りと歴史がこめられてもいたのだ。

④ 彼をかこんだ男たちは銘々自分たちの流した血に昂奮したような声を彼の耳に注ぎこんだ。踏絵シタ足ヲススイダ水ヲ、主ニ対スル贖罪トシテ飲ミホシテイタ先祖代々ノ、カクレキリシタン。殉教ノ血ニ染マッタ土地。信仰ノ自由ヲ回復スルト同時ニ、ヨウヤク明治十三年、ソノ昔、踏絵ヲシタ庄屋敷ヲ買イ取ツテ仮聖堂トシ、明治二十八年、フランス宣教師フレノ神父が自ら設計シ、監督ニ當ツタ聖地、浦上。信者タチハ貧シイ生活ノ中カラ、一錢ヲ得レバ煉瓦ヲ求メ、十錢ヲ得レバカワラ一枚ヲ買ウトイウフウニシテ建設ノ奉仕ヲツツケタ。大正三年、一応ノ完工ヲ見ルマデ、ソレコソ浦上ノ信者タチハ、祖先ト自らノ贖罪ヲカネテ粒々辛苦

ノ末、ヤット完成サセタノデアル。イワバコノ大天主堂ノ赤煉瓦
ノ一ツツツニハ、コウシテ信者タチノ血ト涙ノ祈リト歴史ガコメ
ラレテイタノダ。(四八〜四九頁)

5 なお、「手の家」の舞台は長崎の孤島の切丸部落(架空の地名)、「地
の群れ」は佐世保郊外の高塔新田(架空)と被差別部落と戸島炭坑
と浦上、「夏の客」は広島のパラック街、「母・一九六七年夏」は海
塔新田(架空)であり、長崎市内を中心とした県内の名所・名物は
描かれていない。

6 楠田剛士「井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』にお
ける「再現」の問題」(『近代文学論集』二〇〇九年一月)

7 詩人でもある作者によって、ツル子の出産時の語りには読者を巻
き込むような息づかいが付与されている。例えば次の箇所。「力だ
けでは足りず、私は喚声を上げる。薙ぎ倒される草、土くれの散乱、
水の飛沫、立ちほだかる人々、そして赤い砂浜までのひと息の距離。」
(『明日』二〇九頁)。

出産時の痛みは当人にしかわからないとよく言われる。しかしな
がら、出産を経験しない男性作家の言語表現を通じて、一人称の
語りが読者との距離を詰め、特定の苦痛をいくばくか追体験させう
るのであれば、原爆被災を直接体験していない者による被ばく(者)
表象についても、その可能性ばかりに目を向けるわけにいかない。
それらが受容者との間に何を生じさせるか、ケースバイケースで分
析・考察する必要があるだろう。